ご　挨　拶

久　城　育　夫（地質学教室）

本年４月より評議員を仰せつかり戸惑うことの多いこの頃です。私はこのような役に向いていないと確信しており，理学院計画その他重要な問題が多い時期にその役目を全うする自信は全くありません。しかし選出された以上，理学部の為に尽す義務はあると思いますので，私自身もこれまでお世話になった理学部のことであり，出来るだけの努力をしなければと思っております。それにしても選挙とはいえ多少とも当人の意志が考慮される機会があってもいいとは思いますが。いずれにしても，私はこういうことに未熟なので，皆様方に今後色々と御指導をお願いする次第です。これだけではご挨拶にしても一寸短過ぎる気がしますので，最近改めて感じ，また思ったことを少し書かせていただきます。

執行部の一員となってから，これまでより理学部の色々な分野の方々と接する機会が多くなり，理学部には種々の分野の有能な人材が多く，また今まで私が知らなかった様々な理学の研究が活発に行われ更に新しい計画に発展しつつあることを再認識しました。そのような認識をするにつけ，理学部の能力をより有効に発揮出来ないかということを強く思うようになりました。一つは，種々異なる分野の研究者間での共同研究についてです。地球科学などの応用科学では基礎科学の導入によって画期的な発展をすることがあります。最近の例として，私の友人の地球科学者が，物理学教室の上村研の若手の研究者の方々と，シリカの構造についての分子動力学の計算を非経験的分子軌道法に基づいて行ったところ，鉱物学に衝撃を与える成果をあげ，Nature 誌もそれに対して賛辞をのせました。また，私がしばらく居た米国ワシントンのカーネギー研究所で，核物理の研究者と地球科学者とが日本列島のような島弧の火山の溶岩の^{10}Be を測定し，その火山のマグマが海洋のプレートの物質を含むことを示し，プレートの沈み込みを強力に支持するとともにマグマの成因を解明する新しい手がかりを与えました。このような

例は地球科学だけでなく他の分野にも多くあります。おそらく基礎科学間でもあると思います。カーネギー研究所では，自然科学の種々の分野の研究者が一つの建物の中で研究を行っており，廊下やコーヒー・ルームで，或はパーティなど折あるごとに話をし，常に新しい研究の糸口を引き出す努力をしています。そのような努力はしばしば新しい研究分野を開くことに貢献してきました。理学部はカーネギー研究所などよりはるかに多くの分野の人材を擁しており，互いの研究の利点を生かして共同で研究をする機会がふえると，予想しなかったような新しい研究成果を生む可能性が非常に高くなると思われます。特に，全く違う分野の人達の間での話し合いや議論が面白い結果を生むのではないかと思います。その為には，目下計画中の，そして理学部の“悲願”でもある中央化構想を実現することが必要ですが，それよりもまず理学部の研究活動をお互いにもっとよく知ることがより緊急のことと思われます。その為には予算はあまり必要ではありませんが，お互いの研究活動を知る機会をもっと増やす必要があります。特に理学部の建物が分裂している現状ではかなりの努力が必要でしょう。先日の主任会議で，教授会を利用して研究を紹介することを復活させたらどうかという意見がでました。それも勿論大変結構なことですが，若い人も含めてもっと自由に（出来れば何時でも好きな時に）話し合える場を作ることが必要に思われます。和田学部長も同様のことを考えておられ積極的にこのことを進めるおつもりで心強く思います。

次は若手研究者の研究活動についてです。これは東大理学部に限ったことではありませんが，若手の研究者で少なくとも私の知る範囲の人達は，外国の大学や研究所で何年か研究すると非常な成果をあげて帰ってきます。中には乞われてそのまま向こうでずっと研究を続ける人も居ます。しかし，それらの人達の多くは帰ってからは向こうに居た時に比べて，はるかに研究活動が低下します。これには色々な原因があると思いますが，多くの人の場合は能力が急に低下したのではなさそうです。従って原因は研究する環境の変化（悪化）およびそれに起因する研究意欲の低下にあると思います。勿論，外国でお客さんとして研究に没頭できる条件が，理学部の一員として義務を果たさねばならない場合に満たされるとは思えません。しかし，とにかく能力のある若手の研究者に対してはその条件に近付ける努力はする必要があります。よく知られているように，アメリカでは学位をとってassistant professor になった若手の研究者の多くはtenure を取る為もあるでしょうが，この時期に学生の教育を行うとともに，それこそ”必死”になって自分の研究を発展させます。周囲の人達も彼らの研究がやり易いように予算や時間の配慮をする場合が普通です。またpostdoctoral fellowとなって研究に専念する人も多くいます。ただしこの場合は研究のテーマが多少制約されることはありますが。一方，日本では学位を取って助手になると，いわゆる雑用その他の理由の為に研究が一段落してしまうことが多いようです。また，postdoctoral fellow の数・質ともまだ十分ではありません。学位を取ってからの数年間は独立した研究者として成長する重要な時期で，この時期の研究活動の差が，後年の研究・教育活動の差に大きく影響しているように思われてなりません。日本では色々な事情があってすぐにはアメリカのようなシステムに変えることは出来ないでしょうが，もう少し差を縮めることは何とか出来るのではないかと思います。本当はアメリカなどよりもっといいシステムが出来ればと思っています。そのようなシステムが理学院においてでも実現することが期待される次第です。いずれにしても理学部の優れた多くの人々の能力を基礎科学の為にフルに発揮させないことは極めてもったいないことで，これについての改善策を皆様方とともに考え少しでも実行出来ればと思います。長いご挨拶になってしまいました。